

大工ではないか

マルコによる福音 6:1-6

(そのとき、) イエスは故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡りお歩いてお教えになった。

説教

この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。マルコ6:3-4

多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たなかった、言い換えれば世の中につまずいた出血症の女性は、イエスにすぎたら病が癒されたと先週の福音にはあります。これは、世につまずく人は預言者(イエス)にすぎたという証言です。

ではイエスのふるさとナザレの人々はどうだったかというと、イエスにすぎることはありませんでした。ナザレの人々は世の中につまずいていなかったのかといえば、そうではなくほかのユダヤ人と同様に圧政に苦しんでいました。その意味ではナザレの人々も世の中につまずいていました。ナザレの人々は

世にもつまずき、イエスにもつまずたとすると救いがありません。イエスはナザレ以外のガリラヤ地方で癒しや奇跡をおこない、歓迎されています。このような状況をふまえたうえで、イエスは「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」といったのでしょうか。

キリスト教福音派の考え方のひとつに拡大家族というものがあります。キリストを信じることで他人だったけれどひとつになった、兄弟姉妹になった、わたしたちは親戚みたいなものなのだという考えです。たがいに兄弟とか姉妹とか呼びあうことも薦められています。ただ、今日の福音にあてはめるとまずいことになります。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」とあります。拡大家族の考え方、兄弟姉妹の関係では預言者が敬われなくなります。イエスが軽んじられるということになりかねません。

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足していません。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。ニコリ 12:9-10

「弱いときにこそ強い」これはパウロの有名なことばです。では強いときにはどうなのかといえば、強いときには弱いのです。ナザレの人々はイエスを受け入れません、イエスにつまずきました。それは彼らが強かったのでしょうか、それとも弱かったのでしょうか。自分が強いと思うからイエスを受け入れない、そうかもしれません。自分が弱いからイエスを受け入れることができない、よく考えてみればそうなのかもしれません。

「この人は大工ではないか」といったナザレの人々はイエスにつまずきます。彼らが強かった、弱かったにかかわらず福音から見れば、イエスにつまずく

ことは弱いことを意味します。同じように福音からみれば「弱いときにこそ強い」のです。

つまり弱くことは弱いこと、弱いことは強いこと、だとすると、つまり弱くことは弱いけど、強い？あれれ。

聖書はよくあべこべのことが書いてあります。マルコ福音書ではいまのところイエスのことを一番認め、理解しているのは悪霊だけです。ナザレの人々を筆頭にイエスにつまずく人ばかりです。でもこれが世の姿でありこれも真実なのでしょう。だとすればわたしたちはこれを受け入れましょう。自分も含め人々は誰でもイエスにつまずく、でもそれは弱さの現われのひとつであり「わたしは弱いときにこそ強い」ことを深く知るために必要な主の恵みです。
